CHRONO　FRAGMENT

シー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＨＲＯＮＯ　ＦＲＡＧＭＥＮＴ

【Ｎコード】
Ｎ８６８３Ｐ

【作者名】
シー

【あらすじ】
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１７３６ａ／　の続きを書いてる感じ。ファンフィクションのファンフィクション

続

主人公は女子からペンダントを奪った猫を追いかける。
女子は猫を追いかける主人公を追いかける。

行った先はまるで、クロノトリガーの原作の様なルッカと親父が転送ポッドを人々に疲労している。この話ではルッカの位置付けがティスである。

この転送ポットでディスがテてポートしている所に、主人公と猫が割り込む。
猫のペンダントは光を放ち、空間に次元の穴を開ける。
主人公は猫を捕まえてホット一息していたら、空間に飲み込まれて消えてしまう。

時空間を移動中、彼はパニックになる。
猫もパックで主人公にしがみつくが、その拍子に、時空移動となるキーアイテムであるペンダントをワームホールに落としてしまう。

彼がワームホールから行き着いた先は暗闇の世界、夜

山の林にいきなり放り出されしりもちをつく。猫は抱いていたので無事。
何が起きたのか把握したいが、暗がりである。
視界が悪く月明かりを頼りに右往左往するしかない。
苦難してると猫が道しるべをしてくれ、林を抜ける。
すると山から下を見下ろせる様で町が見える。
タイムスリップした時代は３００年前。
３００年前の自分の町を見つける。

まだ、そらとぶ飛行機も無く、有害物質の防壁シェルターも町に無い状況である。
エレメントの文明も発達していなく、エレメント技術の研究の真っ最中である。
この時代、エレメントの存在を最初に発見した学者をルッカ・ジャスティンと言う。
彼は世紀の大発明家ルッカ一族の末裔である。
エレメントは自然界に内在するエネルギーを自分へと取り込んで使用するものであるが、その器となる物を肌に触れさせていないと発動できない。
その器となるものが、南の大海原のバミューダ海域で見つかった。
人類未知の海底遺跡が発見され、その遺跡の内部を調査した際に器となる勾玉を見つけた。
科学者達が分析すると過程でルッカ・ジャスティンも協力に加わり、後世のエレメント技術に貢献する。

その時代に舞い降りた主人公は行く当ても無く、ハイウェイをさ迷っていると、つかれるヒッチハイクをするけど、無視される。
その先を進んでいると、やけに前方が明るい。猫が異変に気付いたのか走り出す。
無視された車がクラッシュを起こして炎上してる。
2台の車が衝突した様子で、助けに向かう主人公だが、ガソリンがもれている。引火しそう。運転手は既に死んでいるが、もう一人の運転手は足を挟まれて一人では抜け出せない。
動ける方を助ける最中、車から火が出始め、逃げろ状態。だが、助ける。そして車が爆発。
その後、警察と救急が駆けつけて、主人公は身元不明で保護されるとともに、人助けをした英雄として、ネットや新聞に掲載される。
インタビューされり。

一時、預かり的な施設へと送られ、身元引受人が現れない場合は、児童施設へと送られるが、身分証として空飛ぶバイクの免許を持っていた。しかし、ただの玩具だと思われる。頭がおかしいと判断される。

一方、ＡＤ２０００の現代の天才発明家ルッカ・ディスレインは、事の重大さを考えていた。
主人公が時空の穴に吸い込まれた光景を思い出し、光るペンダントに謎があるとした。
異常事態にも関わらず、ディスは冷静だった。
友が消えたと言うのに、知的好奇心が満たされたのか笑顔だった。
金髪の女が主人公の後を追いかけていた事も思い出し、事情を聞くために、話しかける。
「なるほど、やはりあのペンダンとは貴方の・・・・で、それをどこで手に入れたのですか？

「何処と言われましても・・・南東海岸のエルニドという地方の砂浜で・・・

「エルニドというと、龍人伝説の・

「ええそうです。子供の頃家族旅行で観光に行った際に、浜辺で・・・

ルッカ・ディスレインは、椅子にこしかけ、ノートＰＣを取り出し調べ始める。

「あの？　ディスさん　何をしらべなさっているのかですか？

無言のディス、集中していて耳に入らない。

「もしかしてこれですか？

ディスはモニターに映されたペンだんとを、金髪に見せた。

「はい！　これで、私が持っているものと同じものです。

「やはりか・・・

「え？

「３００年程前に、遺跡が発見されたのですが、その文明は私達の文明を進化させる数多くの未知な物質が見つかりました。その中でも、いくつか私達研究者の頭を悩ませるものがありまして、それがこのペンダンとでした。分析をしても判らず、使用用途も解明せず、そのまま手付かずだったのです。そしてそのペンダンとがなぜか、貴方の元とへとある。エルニドの浜辺にある理由は詳しくは判りませんが、恐らく、遺跡の発掘中に海へとペンダントの一部が流されてしまったのでしょう。エルニドと遺跡は距離にして近いですし、周辺一帯に流れる海流もエルニドと遺跡を結んでいる様ですし・・・

ディスレインはバックにＰＣをしまい込み、勢い良く立ち上がる。

その迫力にたじろぐ金髪

「あの？　どうしたのですか？

「今から、そのペンダトを取ってくる。

「ええ？　遺跡までまで向かうのですか？？

「え？

「え？

「そうじゃなくて、ペンダンとが保管されている国際記念館ですよ

「ああ！　そうですよね。わたし、てっきり・・・、　え？　国際記念館ですか？　あそこにある物は国宝級の宝じゃないですか！　それを取りに行く？？

「え？　そうですけどなにか？

「え？、そんな簡単に？？

「ええ、簡単ですよ。

ルッカ、ディスレインは自分に親指を当て自信満々に

「なんせ、わたしってば、あの大発明家ルッカ一族の子孫なんですよ！！

無反応の金髪（ごめんさい。知らないかも。るっかってなに？

「て、あれ？？　このきめ台詞で大体、皆越し抜かすんだけどな～～

恥ずかしそうにするディス

「あ、そうだ。よかったら、あなたも来てくれる？

「え？

「だって、あなたって、幸運を呼びそうなきがするもの。閃きや人類の世紀発見を呼び込んでくれるような・・・さあ、来て！！

無理やり手を引いている

「あ、あのちょっと・・・（汗

流される様についてく、金髪

その一方で猫の飼主は・・・

「あるふれ～～どどこだ？　どこだ？

酔っ払いのおっさんが、町の中を捜していた。今ではもう見かけない木でできた樽の中や、木できたベンチ等の裏を探している。

夜空に向かって猫の名を叫ぶおっさん。

月が猫の顔だとしたら月は笑顔である

ルッカ、カエル、エンディグ視点

かえる「思ったのだが、もし、あの時ラボォスにクロノが殺される遥か前に・・・例えば１０００年際が始まる前にタイムとラベルそのものをクロノが体験する前に俺達がクロノのタイムとラベルを止めさせていたらどうなってんだ？

ルッカ「・・・おそらく、その条件は成立しないわ。クロノがタイムトラベルをしなければ、私達は仲間になっていないし、そもそも、ここに居ない。

カエル「・・・いまいち判らないな・・・俺達はクロノがタイムトラベルを始まる前の時代には飛べなくて、干渉する事もできないってことなのか？

ルッカ「それは断言できない。私も以前からその可能性につて考えていて、過去のクロノに干渉して実験をしようと試みた事があった。けれど、なぜか、できなかった。事件が次から次へと起こるものだし、忙しくて忘れていたの。

カエル「じゃあ、やってみないか。平行世界が生み出されてないなら、過去に行ってクロノに出会える筈だろう。

ルッカ「それはできないわ。何がどうであれ、過去のクロノに関わって私達の存在に矛盾が起きる事は避けなければ成らないと思うの。

カエル「クロノの顔を遠目から少し確認するだけでも駄目なのか？

ルッカ「・・・そうしたいのだけど・・・例えば影からクロノの姿を目視しに行ったとしても万が一、私達がタイムトラベルで現れる時間に別の時間軸の私達が居た場合どうなる？

カエル「どうなるって、もう一つの俺達と、ばったり出う？

ルッカ「そうなるけれど、もしも、タイムマシンが故障したとする。故障した影響でシルバードが、その時間軸に居るシルバート同じ座標に現れてしまった場合、同化して爆発するかもしれない。

カエル「ば、ばくはつ？？

ルッカ「ええ、あくまで仮説の一つだけれど、私達がタイムトラベルできて無事でいたのは奇跡的な事じゃないかと思うの。シルバードと同化して爆発する以外に、山と同化したり土と同化したりと、本当は時間を飛ぶことそのものが大きな危険があるかもしれないの。

カエル「じゃあ、俺達は、もう、タイムトラベルはできないのか？

ルッカ「少なくともシルバードでは無理ね。タイムゲートからなら恐らく大丈夫だけれど・・・

考え込むルッカ

カエル「どうした？

ルッカ「・・・もう直ぐ、タイムゲートが閉じる様な気がするの。

カエル「どうしてそう思うのだ？

ルッカ「私にも良く判らない。けれど、私達の存在意義というものを考えたとき、私達は世界対して余りにも重大な役割を担いすぎた。

カエル「世界をラヴォスの間の手から救ったったことか？

ルッカ「ええ、そうよ。余りも私達がラヴォスに勝つシナリオが出来すぎていると感じるの。まるで・・・そう、まるで何か、大いなる力が働いている様な・・・

カエル「おおいなる・・・神の力？

ルッカ「まあ、そういうものかしら。もし私が神ならば人類にとって必要のなくなったゲートは人類の為に閉じてしまう様な・・・神なんて信じてないけどｗｗ

笑いながらルッカはビールを口にふくむ。

カエル「・・・

マールが１０００年際の広場からジルバードに向かって叫ぶ

「おーいみんなー！　これからモルモルパレードが始まるよ～　はやくおいでー

カエルとルッカは、議論を一時中断させて、広場へと向かった。

セルジュの視点、争いの記憶

僕はスワローを握り、記憶の糸口を探した。
重大な何かを思い出しかった。
けれど、何も判らない。
何かの物体と苦しい戦いをする漠然とした記憶。
なにかのメロディーを聴いている様なでも違うような。

でも、凄く大切な思い出を失った様な、そんな気分だけが僕を支配した。

僕は海辺から村へと帰り途中、なぜか、岬へと寄りたくなった。
そこへ行けば何か記憶の手がかりがある様なそんな気がした。

でも、何も無い。
どうして、僕は、ここに来たのだろうか・・・

村へと帰り、家えと帰り、ベットに付くこの何気ない一連の動作に違和感がある。
村を入り、町の人に声を掛けられる光景、土産物屋に商店の威勢のよさ、居酒屋店主の話し声、そしてレナのあの言葉・・・
全て一度、体験しているかの様なデジャヴを感じる。

僕はベットの中で考え事した。
あてもなく思考の中に入り込み眠れない。
台所で一杯の水を飲んで、もう一度、床につく。

＜夢の中にて＞
セルジュラストバトルの光景が見える。

レナやキッド、他メンバーが戦い争う中で、セルジュの攻撃が炸裂するも効かない。
化け物は目からレーザー砲をセルジュに浴びせる。
仲間達が心配する中、セルジュは絶叫し、夢から覚める。

セルジュは悪夢に、うなされていて、飛び起きる様。

明け方、セルジュは夢の断片を頼りにレナに話しかける。

レナ「どうしたのセルジュ？

セルジュ「えと、レナって金髪の女の子とか友達に居る？

レナ「え？　なんで？　いないよ。

セルジュ「そう・・・

レナ「なんでそんな事聞くの？

セルジュ「あ、いや、別に・・・

セルジュは、はぐらかす様にレナの前を後にした。レナは不思議そうにする。

セルジュは、気を晴らしに海でいる。
一人、一心不乱に泳いでいると、ワカメが足に絡まり溺れそうになる。

脳裏にキッドの顔が浮かび救助されるイメージを見る。
映像の中のキッドは自分を助けた後、暗闇の穴（タイムゲート）へと消えていく。
その顔を何度も思い出し、必要とする様に脳内を駆け巡る。
セルジュはゆらゆらと、あるき。キッドが消えた座標に立ち、パニックする。

「だれなんだ君は・・・。なんで僕は君を必要としているんだ・・・」
頭を抱えて記憶に支配されていると、ペンダントが共鳴する。
時空を飛びえて、アンザー世界（セルジュが死んだ筈の世界）へと際光臨を果たす。

そうとは気付かないセルジュはアンザー世界にて家に帰ると、自宅では無くなってる。
町に入る時から、様子はおかしく、皆がよそ者を見る様にセルジュに対応する。
レナに話しかけるも、同じ反応。7歳の頃にセルジュは海で溺れて死んだと教えられる。
訳が判らないセルジュは墓を確認する。
そこで本編のストーリーと全く同じ展開で、2人組みの騎士に襲われる。
そこをキッドが助けてくれる。

キッドの顔を見て記憶にある絵と繋がる。
そして取り乱してキッドに詰め寄る。
「僕の事しってるよね？　ねえ？　教えてよ。君はダレなの？　あいつ等は、なんなの？前にも襲われた気がする。わからない。

あきれたキッドはなだめる様に
「お前、頭大丈夫か？　さつきの奴等にどっか殴られたのか？？

セルジュは、その場で意気消沈する様に塞ぎ込む。

きっどは、戸惑うようにセルジュ見る。

セルジュはポツポツと自分に起きた出来事を話した。
なぜか判らないけど、自分の墓があって、なぜかは判らないけど、
自分は１０年前に死んだ事になって、皆、自分ことを覚えてない。
夢なら覚めてほしいと呟き。
キッドは不憫に思う。

キッド「ま、まあ、いいじゃねか。別に死ぬ訳じゃないだからよ。
ほら、さっきの奴等から落として行った金もあるし、俺たちのは奴
等に勝利したんだ。とにかくこの金で美味い物でも食ってさ、話は
それからにしようぜ。

セルジュ「・・・・

２人は村で食事を食べてる。
男勝りで豪快に食べるキッドに、あぜんとするセルジュ。
キッドはセルジュが何か言いたげなのだと察して、自分の飯を「こ
れ食うか??」というノリでＫＹする。
キッドは食べ終わり、食べないセルジュの態度に嫌気が差して、感
情を爆発させる。

「おまえ！　オレを馬鹿にしてるのか！！　あ?　命助けても貰っ
といて、飯までおごってもらって、くそ不味そうに飯を食いやがる。
ちょっとかわいそうだと思ったら付け上がりやがって！

キッドは金をドスンとテーブルに置き「あばよ！」と別れを告げようとすると、セルジュは涙を流してワンワン泣き始めた。
これには、食堂の客も皆が白い目でキッド見る。
やむなく、キットがセルジュを慰めるハメになってしまう。

＜慰めが終わった後の食堂にてテーブルに食べられてない飯が残されている。＞
キッドは行儀悪の様に椅子にもたれかかる。
セルジュの飯を食わない態度にあきれて聞く

「お前これからどうすんの？
セルジュ沈黙の後
「早く、夢から覚めたい。

切れるキッド
「あーもう。殴るぞ！　俺はこれから、どうするかって聞いてるんだよ。

おびえるセルジュは沈黙の後
「判らない・・・どこに帰ればいいか判らない。

その言葉を聞いたキッドは深刻そうな表情になる。
「ならさ、オレについてくるか？

「へ？

「といってもオレは・・・・

キッドは周囲の目を気にする様にセルジュに耳打ちする
「実はオレの仕事は泥棒なんだ。実はさっきの２人は金を落とした

のでは無くて俺が抜き取った。

再度周囲に注意を払い。着席する。

「まあ、オレはその道で何年も生きているベテランだからな。オレについて来れば、まあ、まず食うものには困らないだろう。お前はウデッぷしはあるからな、オレの護衛をしてくれるなら、仕事で得た分け前を与えてやってもいい・・・

余り乗る気でないセルジュの表情を見て取ったキッドは、優しい口調から急に高圧的な態度になる。腕を組みガンを飛ばす様に睨む。

「おい！　俺の話しはちゃんと聞いてるのか？

思わずたじろぐ。

「は、はい聞いてます。

「だったら返事は！　ついてくるのか来ないのか？

「・・・

決断できかねる状態のセルジュ対してキッドは

「だったら、オレとお前はここでお別れだな」

そそくさと店から出て行こうとするキッドにすがり付くセルジュ。

「待ってください。僕を一人にしないで～一人ぼっちにしないで～。」

涙を流して足にしがみついてる。

これには周囲の目を気にしざる負えないキッド。

「あ、もう。判ったから、離れろー」

必死でセルジュを引き離そうとするキッドでした。

不思議現象

ディスは今、３００年前の世界に居る。
元の世界とは違う光景に好奇心が隠せないで居る。目をキョロキョロさせる。
小型のビデオカメラを持ち、世界の光景を記録している。
実はディスはあらゆる時空実験の後、ルッカディスレイン自ら実験体となりて次元の穴に飛び込んだ。
次元の先に何があるのかを証拠を持ち現代に帰還するのが目的で、主人公の救助はついで。ルッカ一代目の研究資料から、恐らく過去にタイムスップすると予測をたてて、もし、過去ならばできるだけ干渉しない様に上司から命令を受けていた。

カメラに前で世界の自分達と世界との違いや共通点を話しかけ。
町で人に話しかけてインタビューする。
「今、西暦何年でしたっけ？」

カメラを向けられた人は、カメラだと気付かない。
「え？　何年って、１７００年ですけど・・・？？？」

ルッカは独り言をカメラに向かってしゃべる。
「聞きましたか？　見ましたか？　１７００年代の人類です。わたくしことルッカディスレインは３００年前にタイムスップしました。歴史的偉業でございます。先代の研究レポートは真実でありました。レポートでは次元を飛び越える事は、なぜかもうできなくなっと書かれていましたが、現実は違います。この様に天才ディスが証明しました。

人通りの激しい中、野次馬が集まってきちて、ポリスも居る。

職務質問されるディス。
手に持っているカメラを不審物だと勘違いされて、署まで連行されてしまう。
何をしていたかと問われ、ディスはふてくされる態度を取る。（ルッカ家としてプライドが高いから、高圧的な態度には高圧的に返す）。
身分証は、この時代の人は見たこと無く評価されず、ルッカの名を語るのが偉大な人物の名を語たという事でますます罪人扱いされる。けれど犯罪を犯した証拠も無く、人の良い刑事さんが現れ謙虚な態度で対応する
ケーキとお茶を用意して女子心をくすぐる。

「ルッカ・・・ディスレインさんでしたね。ディスさんは、あそこで何をしていたのですか？　ルッカ家の者なのだから、きっと偉大な事を成し遂げたのでしょう」

その言葉に対して、ディスは気を良くした。
そして、全部を事の成り行きを全部、話してしまった。
カメラの使い方とか、記録した映像を見せ。
そしてエレメント能力についても魔法の様に披露してし、タイムスリップする方法まで明かして、刑事を驚かせてしまう。
己の過ちに気付いたとき土下座しながら、口をつむぐ様、刑事に諭した。
未来が大きく変わるので内密にと必死で懇願した。

その結果、全ての問題が解決。
現代に主人公も戻れた。
刑事はディスの頼みを聞く事と引き換えに未来と過去を行き来して、ギャンブル王になった。主人公も調べて見つけてくれて、セーフ。

だがディスがルッカ一族や研究者から非難を受けたのは言うまでも無い。

＜１０００祭りエンディング　カエル視点＞
パレードが始まり、ルッカとカエルが広場へと向かうも、途中でカエルは抜け出して、シルバードに乗り込み発信させる。「すまぬ。るっか」と呟き現代からシルバードが消失する。

＜中世にて＞
渓谷にて魔王とビネガーが２人青年をボコボコにしている。
一人はカエルの過去で、これから魔王にカエルの姿にされる運命。
もう一人はこれからビネガーに殺されてしまう運命。
カエルはこの２人のピンチ割り込み、魔王とビネガーを殺してしまう。

＜セルジュ世界にて＞
時食いの話題の理論は難しいのでパス
「今日はこの町の宿に止まるぞ」
とある町まで旅をしてきたキッド。セルじゅは安宿に止まる手配をしてる。
その瞬間、時が止まる。
魔王が死んだ瞬間、セルジュの世界に異変が起きた。
トリガー世界の歴史が変わったせいで、別次元のパラレルワールドに何らかが作用したという設定。

＜主人公世界にて＞
ディスは今、主人公に詰め寄ってる。
過去３００年前の歴史の足りない情報が必要だから調査してくれとのこと。
できるだけ、過去の人には接触せずに、仕事をしてくれとのこと。

主人公は嫌がったが、断れない。
弱みを暴露されそうで怖い。
心の中でルッカの先祖を消してやろうかと憎悪もした。
その最中、セルジュのクロス世界と同じく時が止まった。

トリガー以外の２つの世界の次元の時間にストップが掛かるという
不思議現象が発生した。

ルッカ、平行世界の存在を確信する

カエルはシルバードに乗って時空を飛んでいる。
リーネ広場、千年祭中に戻る。
パレードに戻りルッカらいる場所へ向かうが、メンバーが見あたらない。
先程まで、酒をかっくらってたエイラも、パレードを見ていた筈のマールもクロノもルッカも、ゴンザレスと一緒に客の前で踊っていたロボも居ない。
カエルはルッカが時代を変える場合の矛盾について思い出した。
カエルはクロノの自宅へ向かうが、クロノの母は朝早くでていったまま、夜になってもまだ帰らない事を心配している。
ルッカの自宅へと向かうと、玄関口は開いているが、明かりもついてない。
入り、奥の研究室へ向かうと泣き声が聞こえるルッカだ。
ルッカは目の前にいきなり現れたカエルにビックリ仰天。化け物を見る様に物を投げつけて逃げる。
それを機敏に避けながら、カエルは話を始める。
「ま、まってくれ。オレはお前の仲間だ
「なに言ってるの？　私はこんなキモイのしらない。
「信じる事は難しいだろうが、オレはお前を知ってる。クロノとも仲間なんだ。。

「クロノ・・・。クロノは死んだんだ！　私のせいで死んだんだ！
ルッカは自分を戒める様に、攻撃をカエルではなく自分に加える様にうずくまる。
「わ、わたしのせい??」
カエルは呟く
「そう、私がクロノを殺したんだ。
「な、なんでそうなる?
「私が転送ポッドを開発したからなの。
「あ、あれの事か、でもそれがどうして
「クロノは次元の歪に飲み込まれて過去にタイムスリップしたの。信じて貰えないでしょうけど、このペンダントが時空の歪を空けて過去に行く事ができるの。これが無ければ過去の世界と行き来できない筈だから私はクロノを助けに向かった・・・だけど、
「だけど?

「クロノは死んでた。

カエルは泣きじゃくるルッカを抱きしめる。

「大丈夫だ。クロノは生き返る。大丈夫・・・

ーーーーーーーー

ーーーーーー

ーーーー

ーー

ー

カエルはシルバードに乗り込み時空を超える。
ルッカに全ての事情を話した事を思い出している。
ー
ーー
ーーー
ーーーー
泣き止んでいるルッカはシルバードを眺めている。

「正直信じがたい話ね・・・私たちがこれに乗って世界を平和を導くなんて・・・。たしかにカエルさんの言う様に、これで過去に戻って、仲間を助ける自分自身を阻止すれば、全てが何事もなかった様になるかもしれない。クロノも死ななくすむのかもしれない。でも、仲間を犠牲にして本当にそれでいいの？　クロノが助かっても、それじゃあ、貴方は・・・

「大丈夫です。
（あいつが居なければ、どのみち世の中全部は破滅する・・・）

ルッカはカエルの落ち込んだ表情を見て閃く。手をぽんと叩く
「そうだ！

ーーーーーーーーー
ーーーーーーーー
ーーーーーーー
ーーー
カエルは中世へと舞い降りる。
シルバードから飛び降り、境界の前でクロノに出会う。

カエル「はじめまして。オレは、こうみえて王妃を守る剣士だ！助太刀致す！」

大きな魔物を前にして、２人は立ち向かう。

カエルはルッカの言葉を思い出してた。

ルッカ「貴方がもう一度、世界を救えばいいのよ。カエルであるべき貴方が、存在しない時代でクロノと出会う事ができないのなら、その時代の・・・クロノと出会う最初のカエルの役割を演じるの。そうすれば歴史の矛盾は全て消えた様にみえ、皆が助かる・・・

このルッカの言葉を胸にカエルはもう一度世界を救うために戦う。この後、ルッカのとも出会うが、勿論、ルッカはカエルを始めて見るので何も知らない。いつもの様にカエルの姿に驚くルッカを見て、カエルは少し笑う。

そして再度、世界を救った後の未来で、カエルは自分が隠していた出来事の真実をルッカに語って聞かせる。

ルッカは、その話を聞いて、ますます、平行世界の確信を強めた。カエルが時代修正をするには、カエルが１度目に間違って過去を変えた要因が成立しなくてはいけない。成立するという事は、その時代のルッカがクロノを殺してしまった

と思い込んだ世界も成立する前提が無ければならず、その世界が存在しなければならない。
目には見えないが平行世界として、どこかの次元に存在している。
それを自覚したルッカは、カエルにその時代の別次元のルッカを救う事ができなかった事実を言えずに、躊躇い、言葉を飲み込んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8683p/

CHRONO　FRAGMENT

2011年1月9日07時44分発行